AIDS UPDATE No.128 2019/8/22

発行者:広島大学病院　エイズ医療対策室　内線5351
中四国エイズセンター http://www.aids-chushi.or.jp

U=U：効果的な治療を続けていれば HIVは感染しない

おだ内科クリニック　高田　昇

■　私は、広島大学病院でHIV検査ができる前から診療をしてきました。昔は「エイズは死ぬ病気」で「うつる病気」でしたから、担当する医療者も患者さんや回りの人もその重圧を受けていました。ところが30年あまりで大きく様変わりしました。

★今ではHIVでは死にません

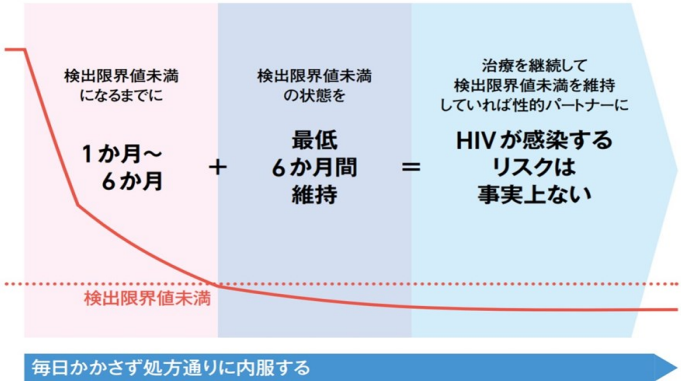
■　現在、日本では毎年1,400人ぐらいの人が新しく診断されています。その3分の1は、エイズ発症つまり日和見感染・がん・認知症など診断が遅れた人たちです。エイズを発症すると回復する人もいますが、今でも約1割の人は亡くなっています。

■　エイズ発症前に診断された人が、服薬を始めると血中からウイルスが消え、免疫能も正常になり、感染していない人と同じように生活ができます。治療はほとんどが、1日1回で副作用も軽くなりました。

★薬を飲んでいれば他人にうつりません

■　血液の中のHIVの量は、遺伝子増幅法で測れます。下の図は米国NIHのNIAIDが公式発表したものを翻訳したものです[www.janpplus.jp]。

■　このように検出限界以下を半年以上保っていれば、性行為によるHIVの感染は発生しないと宣言しています。



★検出限界以下ならうつらないエビデンス

■　HIV感染妊婦さんの治療をすると、赤ちゃんへの感染が30%から0.5%以下に低下するという観察があります。

■　しかし最も印象的だったのは、HPTN 052という大規模無作為化試験です。片方が感染者、もう片方が非感染者というカップル1,763組を対象に、早期に治療を開始する群と、CD4数が350に下がるまで待機する群に割り当てたところ、早期群で96%の感染が予防されたというものです。唯一の感染例は、開始早期例でウイルス量低下が不十分でした。その後5年間の観察では1例も感染がありません。

■　最近、感染・非感染のカップルを対象にした大規模試験が行われました。PARTNER1/2研究、Opposites Atract研究を合計しますと、同性や異性のカップル72+516+343組で、観察期間中に合計130,000回のコンドーム無しの挿入を伴うセックスが行われました。結果、ウイルス量が検出限界以下の感染者からは1例もパートナーへの感染はありませんでした。当然ながらHIV以外の性感染症の発生率は変わりませんでした。

★　U＝Uは公認の合い言葉

■　U=UはUndetectable equals Untransmittable の略号で、「効果的な治療を続けていればHIVは感染しない」という意味のキャンペーン用語です。今や国連機関(UNAIDS)、国際エイズ学会(IAS)、アメリカCDC、イギリスHIV学会(BHIVA)など100ヶ国以上の国の870団体が賛同しています。日本エイズ学会も昨年の理事会・総会で支持が表明されました。

★早期発見が大切

■　「感染をなくすためには治療」が大切、そのためには「感染がわかる」ことが大切、そのためには検査の提供を広げることが大切です。医療者は目の前の患者さんに「HIV検査を受けてみませんか」の一言が大切です。

第38回薬剤師のための抗HIV薬服薬指導研修会
令和元年度第1回HIV/AIDS専門カウンセラー研修会
同時開催　～20周年記念大会に参加して～

薬剤師　石井 聡一郎

抗HIV薬服薬指導研修会には3年連続3回目の参加でした。昨年7月に開催予定であった20周年記念大会が豪雨災害のため中止となり、今回はそのリベンジの研修会でした。

研修会ではACCセンター長の岡慎一先生など、HIV診療に古くから関わられている各職種の先生方の講演、パネルディスカッションがあり、決して順風満帆ではなかったHIV診療の歴史について改めて学ぶことができました。

まだ数年しかHIVに関わっていない私が、これまでいかに表面的な部分しか把握できていないことが良く分かりました。進歩し続ける薬剤のことだけでなく、患者さんの社会的、心理的な側面も学び続けなければならないと気持ちを新たにすることができました。

2日目のロールプレイでは、グループに分かれて事例を設定し、面談目的に応じた実践形式でみっちりと演習します。ここでは普段の服薬指導をビデオで撮影し、演習後は参加者、講師の先生などと振り返りを行います。薬剤師はこのような集中的な面談練習をあまり行ってきていませんし、他の薬剤師がどのような面談を行っているかを知る機会もほとんどありません。

本研修では心理士やMSWの面談も見ることができ、さらには各職種の講師の先生からのコメントもいただけることから、これまでの自分自身の面談の振り返りが行える貴重な機会だと感じます。治療効果が高く、副作用が少なく、1日1回1錠の薬剤が主流の時代になっていますが、内服薬がある限りは服薬アドヒアランスの向上は永遠の課題と言えます。毎年研修に参加する事で日々の面談をよりよい面談にしていけるよう引き続き努力していきます。

広島県HIV派遣カウンセラー　黄　寛美

2年前に、HIV/AIDS専門カウンセラー研修会に初めて参加した時「これは大変な領域に飛び込んでしまったのでは」と冷や汗をかいたことを覚えています。多職種の方々と一緒に研修をするという経験も初めてのことで、とにかく参加することに必死でした。

今回、派遣カウンセラー3年目になると、少し落ち着いて周囲を見渡す余力が生まれ、自分自身が抱いている「価値観」への気づき、多職種の視点を多く学べたと、振り返ることができました。心理・MSWの事例検討では、納得がいかない、モヤモヤとしたものが広がり、一体このモヤモヤしたものは何だろうか…という気持ちが出てきました。参加者の意見や質問、感想を聴いていくうちに、今回の事例が自分の価値観、常識とずれているから違和感を抱いたということに気づきました。

また、クライエントに何か困ったことが起きた時に、助けることができるような関係を築いていくことや関係性を繋いでいく意識を持って関わることを学ぶことができました。

薬剤師、MSW、心理職で行うロールプレイでは、グループでのシェアリングの際に、薬剤師の方から心理職の言葉の使い方について質問がありました。心理職にとって「当たり前」であることが、他職種にとっては疑問として出てきやすいことに気づかされました。
私もロールプレイ中、薬剤師の質問の意図を改めて知ることができ、他職種の役割について理解を深めることができました。

多職種同士で研修を行うと「患者支援」という同じ目的であっても職種によってアプローチ方法や立ち位置が違うことを認識することができ、他職種の姿勢から自分自身の関わりについて向き合い考えることができる、ということが魅力の一つだと改めて感じることができました。

第37回・第38回 看護師のための エイズ診療従事者研修会を終えて

2019/6/27・28　　2019/7/25・26　開催

エイズ医療対策室の看護師佐々木です。この度、第37回・38回看護師のためのエイズ診療従事者研修会を開催いたしました。
中国四国地方のHIV診療の初心者の看護師を対象に、約20年前から開催しているこの研修会ですが、応募は年々増加し、今回は37回・38回を合わせて、40名もの参加がありました。

参加者の所属部署は、一般外来や血液内科の他、救命センターや産婦人科など幅広い領域から受講されていました。

参加動機をみると、**「HIV診療でのコミュニケーションスキルを磨きたい」**や**「患者指導の知識や方法を、より深めたい」**というほかに、感染管理の視点から**「HIVの基礎知識を学び、正しい知識をつけたい」**という希望で参加されている方が多く見られました。

2日間の研修プログラム

「HIV/AIDSの基礎知識」医師
「薬害エイズの歴史」医師
「抗HIV薬の内服援助について」薬剤師
社会資源の活用」ソーシャルワーカー
「性の多様性」NPO法人アカー
「HIV陽性者の看護」看護師
「患者さんの体験談」患者
「HIV陽性者さんとの交流」NPO法人ジャンプ+
「IV疾患と歯科」歯科衛生士
「HIV陽性者の心理的支援」公認心理師
「初診時問診聴取」演習
「チーム医療の実際」事例検討

研修スタッフとして、病院内から
SICU木佐貫師長、HCU下川師長9西木下副看護師長、Ⅰ外来池田看護師、宮原看護師に御協力いただき、また、閉会時には山本看護部長、和田副看護部長に御挨拶いただきました。

皆様、研修会への御協力
ありがとうございました。

実際のプログラムでは、各職種から基礎知識のレクチャーの他に、薬害エイズ被害者の患者さんやHIV陽性患者さんにお越しいただき、患者さんの思いや医療者・看護師に対する思いなど、生の声を聞かせてもらいました。
また、患者役・看護師役になりきり、ロールプレイ形式で「問診聴取」を演習し、その両方を体験することで、HIV看護特有の**「性に関する情報を聴取する際の留意点や配慮の必要性」**を学んでもらいました。

＜終了後の参加者アンケート＞

＊ウイルス量がきちんとコントロールできていれば感染することはほとんどないということを知らなかったので驚きました。
＊事例を使い問診聴取を実践し、性のことをどう聞くのかすごく勉強になりました。
＊今後、患者の高齢化に伴い、地域への受け入れが課題となるため、在宅、施設の支援（知識を深めてもらうこと）が、必要だとも感じました。

などの声がありました。

研修終了後、研修生・スタッフと一緒にパシャリ★★

HIV診療チーム新メンバー紹介

HIV診療チームは、血液内科医師・総合診療科医師・薬剤師・看護師
社会福祉士・公認心理師・歯科衛生士で構成しています

総合内科・総合診療科医師　重信 友宇也（しげのぶゆうや）

初めまして.この度HIV診療チームに参加させて頂くこととなりました
初期研修を熊本で行い，その後広島に戻り当科に入局，以後は家庭医療学を中心に学んで参りました.
これまでHIVの診療経験がなかったため，新鮮な事ばかりであり非常に充実した日々を過ごさせて頂いております.
将来的には地域医療に従事する予定であり,家庭医の立場から何かしらの形でお力添えできればと考えております.
色々とご迷惑をお掛けするかと存じますが，何卒ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます.

エイズ医療対策室　MSW　大成　杏子（おおなり　きょうこ）

2019年5月よりエイズ医療対策室に入職しました。
これまでは神奈川県内の精神科デイケアでMSWをしていました。
今は新しい仕事での発見の連続に毎日とても充実しています。
患者さんの生活環境調整のお手伝いにつながるよう、
広島の特性や情報、社会資源をどんどん学びたいと思っています。
好物はビール、好きなことはハワイにまつわるものや手芸、読書、映画です。
広島の風景が好きで毎朝、川の流れをぼーっと観察しています。
これからどうぞ宜しくお願い申し上げます。

エイズワーキンググループ

私たちは、HIV/AIDS診療に関わる看護師が、課外活動として有志で活動しているグループです。
今年度は18名での活動スタートとなりました。HIV/AIDSに関する最新情報をもとに知識を深めたり、看護実践能力を高めることを目的に、自分たちのペースで活動をしています。
今年度は、例年の研修協力や検査イベントの参加以外に、「外国人医療」をテーマに公開学習会を開催予定です。新しいメンバーも随時募集中です。是非、一度定例会を覗きにいらっしゃいませんか？
興味がある方は
エイズワーキングリーダー　Ｉ外来：山下看護師までお声かけください♪

定例会開催日：2ヶ月に１回（第２木曜）
9/12、11/14、12/12、2/13、3/12
時間：17:30～18:30
場所：入院棟3階カンファレンスルーム